

発達保障の道

～歴史をつなぐ、社会をつくる

【第8回】

根っこを照らし新たな地平を拓く



金沢大学
河合隆平

かわい りゅうへい

1978年福井県生まれ。金沢大学准教授、全障研常任全国委員。専門は、障害児教育学。著書に『発達保障ってなに?』共著（全障研出版部）など。

大学は教育実習の真っ最中です。実習の様子をうかがうと、学生なりに試行錯誤しながら「子どもから学ぶ」ということを少しずつ実感しているように思います。教育・保育実践において子どもから学ぶことは大切だといわれますが、決して容易なことではありません。今回は1970年代の障害児保育の始まりに焦点を当てながら、子どもに学ぶ・教えられるという経験が同時代の人びとにもたらした意味をふり返り、そこから新たに拓かれていった発達保障の地平を確かめてみたいと思います。

「保育元年」——障害児保育の始まり

障害のある子どもすべてに義務教育を保障しようとする運動は、1970年代に入ると養護学校義務制実施を見通しながら、乳幼児の保育・療育の場づくりにつながっていきます。いっぽう、1960年代半ばから、働く女性たちは産休明けからの乳児保育を求め、「ポストの数ほど保育所を」という保育所づくり運動が広がり、すべての子どもに集団保育を保障しようという声とともに、障害のある子どもの保育要求も大きくなっていました。

滋賀県大津市では、山田耕三郎革新市長による「人間をたいせつにして市民の生活を高める市政」のなかに保育政策が位置づきます。1973年を「保育元年」として全国で初めて保育所、幼稚園への入園を希望する障害のある子ども全員を受け入れを開始しました。一般的に、保育所は親が就労していたり病気のために「保育に欠ける」子どもだけに対象を限定していたので、障害のある子どもは入れませんでした。ですから、国の障害児保育制度（1974年）に先駆けて「保育に欠ける」という要件に子どもの障害を含めることで、子どもの発達に必要な条件を保障する仕組みをつくり出したことは画見つめて歩きつづけましょう」と気持ちを新たにしたいといっています。

大津方式は「健診もれゼロ、発見もれゼロ、対応もれゼロ」という「3つのゼロ」という目標と、これをめざす保健婦（当時）や発達相談員の熱意と努力によって支えられました。健診や療育の場で子どもの発達の事実を母親と分かち合い、不安や悩みを受けとめ、子育ての喜びと見通しを手渡ししながら、子どもの発達に必要な生活の自身を、母親と共同でつくり出していきました。「親は子どもの発達の第一線にいる。ここに協力して、その願いと結んで激励するのだから、健診が子どもたちの発達を保障する活動になっていくことは難しい」とは、大津方式の基礎を築いた発達相談員、田中杉恵の言葉です。

映画「光の中に子供たちがいる」と「人間」の希求

大津市は、広報映画『保育元年』『続保育元年』『続々保育元年』によって障害児保育の実践を記録しました。これらを手がけたのが、びわこ学園の療育記録映画『夜明け前の子どもたち』（1968年）の製作に音響スタッフとして参加した大野松雄でした。

大野は続けて、大津市立朝日ヶ丘保育園を舞台に、カズエちゃん（3歳10カ月、ブラダーウィーリー症候群）という女の子の入園から卒園までの3年間を記録した『光の中に子供たちがいる』（3部作、1975〜77年）を自主製作しました。映画は、カズエちゃんの発達を軸に、子ども集団の育ち合いを描き出しています。モノクロ映像（第3部のみカラー）でありながら、個性あふれるカズエちゃんの育ちは明るくて誇らしく、子ども同士のかかわり合いも自然に描かれています。

カズエちゃんは、友だちや先生と同じことをやってみ

期的でした。

子どもの発達に必要な生活をともにつくる

大津市の障害児保育制度は、1973年から75年にかけて整備された「大津方式」といわれる、乳幼児健診から保育・療育・就学へとつながる障害乳幼児対策に組み込まれていました。1950年代末、戦後初期から続く、乳児のいのちと母親の健康を守る母子保健のとりくみに近江学園の研究スタッフが参加・協力していきます。発達研究や乳幼児健診で得られたデータを根拠として発達診断・相談の視点が加わり、医師会の協力も得ながら、総合的な発達保障の仕組みとして結実していきました。発達保障の思想と地域の児童福祉や母子保健の仕組みを結びつける共同の努力によって、地域に生まれ育つ子どもの発達と健康を守り、子育てを社会化していく素地が固められていったのです。障害のあるわが子にも当たり前の生活や集団を保障したいという親のねがいが「やまびこ園・教室」という早期療育の場をつくり出し、保育所、幼稚園での受け入れを進める原動力となりました。

ある母親は、やまびこ教室に2年間通ううちに、わが子に体力がつき、食欲もさかんになり、感情も豊かで友だちもたくさんできたので、「これ以上のことは望むまい」という気持ちでいました。しかし、「子どもにとっでおいしいものは、食べるものだけではありません。目で見るもの、耳で聞くもの、すべてがおいしいものなのです。だから、もともともと、いろんな経験をさせてあげてください」と教えられ、「これからそのおいしいものをさがしながら、毎日を歩きつづけたいと思います。だから、よそ見をしたり、後をふりかえったりしないで、少しでもいいから前を見ながら、いいえ、前だけを